

# ふるさとの 其の30 誇り

## 氷河時代からの生き残り 「ライチョウ」



ライチョウの親子



オス



メス



冬毛に変わる途中のライチョウ

北岳や仙丈ヶ岳といった南アルプスの高山には、ライチョウが生息しています。日本では南アルプスのほか、北アルプスや御嶽などに生息しており、これらの地域に約3000羽います。しかし、近年南アルプスのライチョウの数が減っているといわれ、絶滅が危惧されています。

ライチョウは氷河期に日本列島が大陸と陸続きのころ渡って来たといわれ、その後氷河期が終わるとともに、日本列島が大陸と切り離され、高山に取り残された鳥です。氷河期から生き続ける貴重な鳥ということで大正12年に国の天然記念物に、昭和30年には国の特別天然記念物に指定されました。

ライチョウの大きさはニワトリと同じくらいで、羽は夏は茶褐色、冬は全身が白くなります。昼間は主にハイマツ等の下に潜んでいて、朝夕や霧の立ち込めるようなときに草地に現れます。

ライチョウは4月頃につがいを形成して、5月頃繁殖期に入ります。この頃は、山は雪に覆われており、登山者も殆ど訪れません。6月頃にハイマツの下に巣を作り、4個から8個の卵を産みます。この間、雄は見張等をしますが、孵化とともに家族から別れて雄同士の群れを作ります。雌は天敵のオコジョや猛禽類が現れると、怪我をしたようなしぐさをして注意をひきつけて雛を守り、ずっと付き添って育て、10月には雛も成長して巣立っていきま

す。

南アルプスのライチョウは世界の南限に位置し、生息地も孤立しているため温暖化の影響を最も受けやすいといわれています。

近年、温暖化の影響等でサルやニホンシカがライチョウの生息地まで侵入

するなど、大変危機的な状況にあります。登山者の中にもゴミを捨てたり、ライチョウを追いかけたりするなど心無い人がいます。

平成16年から毎年、信州大学によるライチョウの生息調査が行われていますが、30年程前の調査と比べると、4割程に減少していることが明らかになっています。

平成17年には「第6回ライチョウ会議」が本市で開かれ、ライチョウの置かれている現状や、環境保護等について話し合いが開かれました。

この鳥を後世へ残していくために、私たちにできることを考えていきましよう。

※3ライチョウ会議はライチョウがトキやコウノトリのように絶滅してしまう前に、ライチョウに関する様々な調査分析、保護対策を確立することを目的に平成12年に設立された会です。

※1ハイマツ…マツ科の常緑低木。本州中部以北の高山に自生。  
※2オコジョ…イタチ科の哺乳類。